

大学生の性意識と性行動

——第3回調査結果の検討——

善 積 京 子

The Sexual Attitudes and Behavior among University Students

—Results of the Third Research—

Kyoko YOSHIZUMI

I 研究目的および命題の設定

婚前の性意識・性行動のテーマは、アメリカの「家族社会学」の中でも重要な領域として扱われ、これまでに多くの調査結果を蓄積してきている。とりわけ、Ira L. Reiss の業績は大きく、多くの研究者は Reiss の PSP 尺度 (premarital sexual permissiveness の略) を用い、また彼の提唱する婚前の性的許容性に関するいくつかの命題の検証に関心を払ってきた (Reiss 1960, 1969, 1979)。1970年代以降は特に概念の明確化、尺度・方法の厳密化、理論と調査の統合がはかられ、R.K. Merton の「中範疇理論」が適用されている数少ない領域と言われている (Clayton, et al. 1980)。

一方日本の「家族社会学」の分野では、性意識や性行動を正面から論じられることはほとんどなく、配偶者選択のプロセスの中で少しばかり注意が払われてきたにすぎない。このテーマはむしろ発達心理学、性差心理学あるいは生物学の分野で取り上げられ、アメリカに比べて量的にも質的にもまだまだ及ばず、現在、仮説検証的調査研究の積み重ねが望まれる段階にある。本調査報告はそのための一つの試みであると言える。

筆者はこれまでも大学生と高校生を対象に「若者の性意識調査」を1971年と1981年の2回にわたって実施し、それについて報告もしてきた (善積1983, 1986, 1987)。そこで、この結果を考慮し、またアメリカの研究成果を踏まえ、いくつかの命題を設定し、今回の第3次調査でどれほどその命題が妥当するか検討してみる。

最初の命題群は<性差>に関するものである。筆者の調査データで男女を比較すると、男子回答者の方が女子回答者よりも性行動に対して全般的に許容的であり、男子の方に伝統的二重

規準の傾向が強くみられた。こうした結果から、「男性は女性よりも性行動に許容的である」という＜性差＞の第1命題、「男性は女性に比べて伝統的二重規準を支持する割合が高い」という＜性差＞の第2命題、さらに第2回目に追加した性行動の項目結果から「男性は女性に比べて性経験の割合が高い」という＜性差＞の第3命題が導かれた。

アメリカでも Kinsey (1953) のレポート以来、1960年中頃まで、前述の性差についての3つの命題が支持されてきた。ところが1960年代の性革命により、大学生の性意識・性行動に変化が生じ、近年こうした＜性差＞の命題群の存立が危うくなってきている。第1に大学生の性意識は1960年代後半より許容的になり、特に女子学生の間で婚前性交を認める人が増加し、女子学生は男子学生にかなり近づいてきている (Bell 1970, Christensen 1970, Robinson et al., 1972, Reiss 1979, Singh 1980, Jacoby and Williams 1985) そして、婚前の性的許容性の判断規準に婚約の有無は考慮されず、男女ともに婚約の意味づけが薄くなる。今でも婚前の性交を認める割合は幾分男子の方が上まわっているが、性差は単に婚前の性交を認めるかどうかの次元でなく、性関係に情緒的なものをどれほど必要とするかの次元に移行し、女性の方が男性に比べて愛情重視の傾向がみられる。

婚前の性規範に関して、アメリカでこれまで注目されてきた態度パターンは二重規準 (double standard) であった。これは性行動に対して男女の間に違った基準を設けるというもので、男女に同一の基準を適用する単一基準 (single standard) と対概念を構成している。歴史的にみると、「女性には厳格で、男性には寛大」という型がほとんどであり、二重規準と言えばこれを指すことが多い。しかしここでは、Ferrell (1977) にしたがって、男女逆の場合 (reverse double standard) と厳密に区別し、伝統的二重規準 (orthodox double standard) と呼ぶことにする。以前の調査では、女性は単一規準を支持する割合が高く、男性の方に伝統的二重規準を支持する人が多く、＜性差＞の第2命題は支持されてきた (Reiss 1960, Smigel 1969, Verner and Stewart 1974, Walsh et al. 1976)。1970年代以降次第に、特に男子大学生において単一規準の増加がみられ、＜性差＞の第2命題は支持されなくなってきた (Ferrell 1977)。Jacoby と Williams の調査 (1985) では、「男女とも等しく性的満足を最大限認めるべきだ」という単一規準を大部分のものがもち、統計的にも男女の有意差は全く見いだされなかった。

次に性経験者の割合をみると、特に女子において急激に増加し、男子の水準に近づきつつある。Robinson (1982) の大学生調査では、その割合は1965年では男子65.1%、女子28.7%であるが、1980年には男子77.4%、女子63.5%と女子の値が飛躍的に増大している。現在でも、男子の方が性体験者の割合が少し上まわっているものの、＜性差＞の第3命題も崩れつつある。

ちなみに、性行動と性意識との関連に言及しておくと、1960年代後半から1970年代にかけては、性体験の割合の増加の変化よりも性意識の許容化の変化の方が大きかった (Ferrell 1977)。ところが、1980年代に入ると、性の自由化の行き過ぎによる弊害が指摘されだす。たとえば、

処女であることが「男にもてない」という不名誉なシンボルになり、気軽に誰とでもセックスすることが良いとされ、気が進まなくとも拒否することが難しくなり、人によっては「フリーセックス free sex」は「強いられたセックス compulsive sex」になっていた。これに代って、自分がしたい時のみ関係をもつという「新しい禁欲 new celibacy」の流れが生れてきた。晴天の霹靂のごとくアメリカを襲った AIDS は、さらに「安全なセックス safe sex」の観念を強めることになった。この間、一方では性体験者の割合は相変らず増加しつづけているものの、性行為に相手との深い関わりを重視する規範への揺れもどしが起きている (Robinson 1982, Carroll 1988)。

本稿の第1の目的は、第1回調査から15年経過した現在でも、＜性差＞の命題が有効であるかどうかを検討することである。日本でもフェミニズム活動が根をおろしつつあり、“女性であること”による抑圧・差別の問題に関心が払われてきている。女性の職場への進出だけでなく、ファッションや体型までも男女が近づいている昨今、性意識・性行動の面でも性差がアメリカのように縮まってきているかも知れない。＜性差＞の命題がどの範囲まで有効であるのかを詳しく調べてみよう。

二つ目の命題群は、＜成熟の効果＞に関するものであり、これについては Ferrell (1976) の優れたパネル調査が参考になる。彼は最初大学1年生を対象に調査を1967年と1970年に実施し、4年後に同一の対象者に同じ質問を行ない、高学年になると許容性が高まる結果を得た。そこから、「若者が成熟するほど、性意識は許容的になる」という＜成熟効果＞の第1命題を導いた。さらに男女の許容性の変化を比較すると、女性の方が1年生から4年生への変化が大きく、男性の許容性の程度に近づいており、「若者が成熟するほど、男女間の許容度の差は縮小する」という＜成熟＞の第2の命題を得た。二重規準の割合の変化については、Verner (1974) がすでに調査していたが、その時のデータでは学年が上っても二重規準は消滅していなかった。しかし Ferrell の場合、4年後には男子の伝統的二重規準の割合は減少し、単一規準の割合が増加していた。そこで、「若者が成熟するほど、伝統的二重規準は弱まる」という＜成熟効果＞の第3命題が成立することを示唆した。

筆者の実施した調査では、高校生よりも大学生の方が性行動も進み、性意識も許容的であり、＜成熟効果＞の第1命題は支持される。しかしながら、高校生・大学生ともに男性の方が女性よりも許容的であり、＜成熟効果＞の第2命題は否定される。さらに、男子では逆に大学生の方が伝統的二重規準の割合が多く、＜成熟効果＞の第3命題は女子のみ支持される (善積 1986)。

以上のように、Ferrell の研究成果をもとにした＜成熟効果＞の命題は、筆者のこれまでの調査では、部分的にしか支持されない。本稿の目的の第2は、1986年実施の調査でこの＜成熟効果＞の命題がどのような条件のもとでどのような性行動の時に有効かを精密に検討することにある。もっともこの諸命題は、Ferrell のように同一対象を数年後に再調査し、その変化を把握

ることで初めて正確に実証しうるものであろう。筆者は、調査時点で大学1年生であった人が4年生になる1989年に再び同様な調査を実施する計画である。今回はその第一歩として、1年生と4年生との比較から＜成熟効果＞の諸命題を検討することにする。

最後の命題群は＜時代効果＞に関するものである。筆者の実施した2回の調査をみると、性規範が全般的に緩やかになり、時代の流れによる影響が読みとられる。つまり戦後の日本では、「時代が進むほど若者の性意識が許容的になってくる」という＜時代効果＞の第1命題が有効である。

アメリカでは1960年後半の性革命以後、若者の性意識が許容的になっていたが、前述のように1980年代に揺れもどしが起こり、「愛情が伴う場合」といった条件付きでないと支持されなくなっている。しかし現在でも「時代が進むほど、伝統的二重規準は減少する」という＜時代効果＞の第2命題は支持されている。

一方日本では、許容度の変化は女性に対するよりも男性に対する方が大きく、そのために伝統的二重規準の割合は男女ともに10年前よりも逆に増加し、したがって、筆者の調査では＜時代効果＞の第2命題は完全に否定されている。

今回の報告では、紙幅の都合からこの＜時代効果＞の命題については検討を行わない。また第3回目の調査票では Reiss の「婚前性行動許容性の自律理論 (Autonomy theory of premarital sexual permissiveness)」にもとづき、性意識を規定する要因を考察するための質問項目が含まれているが、この「自律理論」の検討作業も今回は見送り、別の機会に行う予定である。

II 性意識・性行動の実態

1. 調査概要

今回は大阪府下の四年制大学に焦点を絞わり、学校間格差をコントロールし、協力が得られた7大学で調査を実施した。7校のうち、国公立は2校（女子大学1校）、私学5校（女子大学1校）である。このうちの5校は、すでに第1回調査（1971年）もしくは第2回調査（1981年）ですでに協力を得ている大学である。

今回の調査では対象者の学年を1年と4年に限定した。それは前述のように3年後（1989年）にも同じ対象校の4年生と1年生に同一質問項目でパネル調査を実施し、＜時代効果＞と＜成熟効果＞の影響力を比較する計画のためである。

調査方法は質問紙による自記式回答式を採用し、ほとんどの大学では授業担当の先生の協力を得て、授業時間中に集合調査の方法で行った。しかし、ある大学の学科の4年生はすでに一斉授業が終了し、個別指導のみになっていた。その大学のみ一部郵送調査を用いた（38票、回収率56%）。

調査期間は1986年6月23日から7月5日の2週間である。有効票は女子876票（1年生509, 4年生367）、男子710票（1年生389, 4年生321）であり、有効率は98%であった。

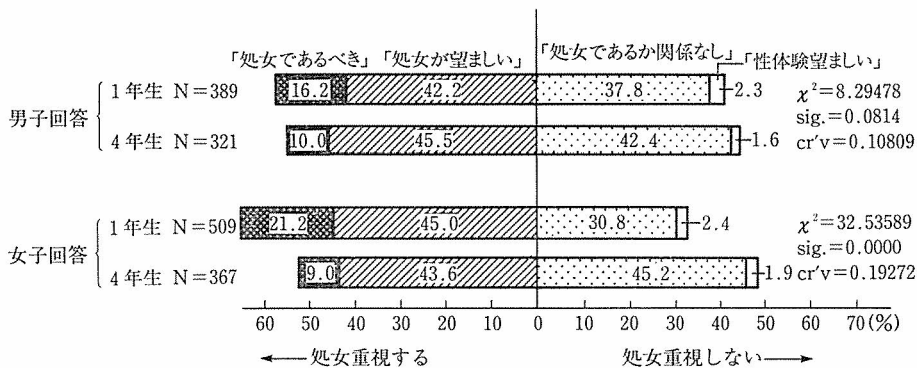
婚前性行動に対する許容度についての質問項目は、Reiss (1977) の PSP の尺度をアレンジして用いた。婚前の性行動の許容度はその関係の中に含まれる愛情の程度と強く結びついているとし、Reiss は関係性のレベルを①婚約 (engaged)、②恋愛 (love)、③強い愛情 (strong affection)、④愛情なし (no affection) の4段階に分けた。筆者の調査では、これに「婚約なし」の段階を加えた。性規範に関する項目では、男性に向けられる規範と女性に向けられる規範が同じものであるかどうか、つまり、二重規準の程度が測定できるように組み立てられている。

2. 婚前の性行動の規範

処女・童貞の評価

軽薄短小の時代、セックスや恋愛までもが手軽に扱われ、＜遊び＞感覚が強まっていると言

① 処女の評価



② 童貞の評価

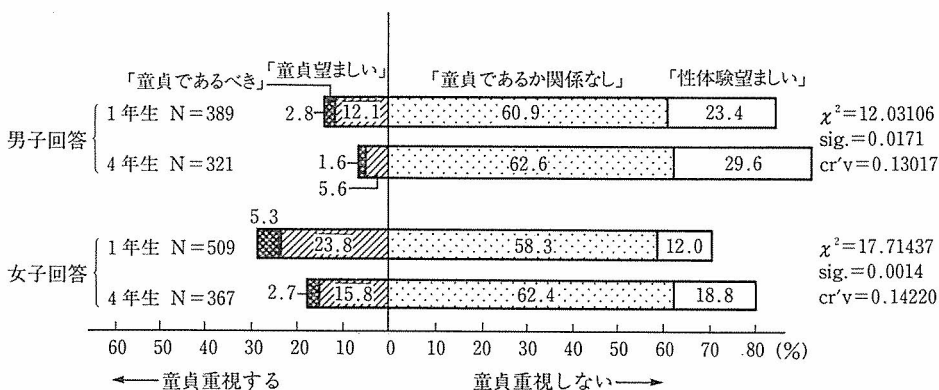


図1 処女・童貞の評価

われる。「婚約や愛にこだわることなくセックスを楽しんでよい」とする若者が、はたしてどれほどの割合を占めているのであろうか。まず、処女・童貞の評価から検討しよう。処女の評価では、図1のように意見が「処女が望ましい」と「処女であるかどうか関係なし」に大きく二分されている。女子では「処女であるべき」が4年生では9%にすぎないが、1年生では21.2%もあり、1年生の方が処女重視の傾向がみられるが、男子の場合には学年による有意差はみられない。

次の童貞では、「童貞であるかどうか関係なし」が圧倒的多数を占め、「性体験をもっている方が望ましい」も男子では2割以上、女子でも1割以上もある。そのうち、男子4年生が最も許容的で、9割以上が童貞を特別視していない。男子よりも女子の方が童貞を重視しがちであり、また4年生よりも1年生の方にその傾向が強くみられる。

同一回答者による処女・童貞についての評価のずれを測定したものが表1(122頁)のガンマ係数である。処女と童貞との評価の一致が回答者全員に見られるならば、このガンマ係数は1の値を示す。これらの評価が一致していない人が多いほど、ガンマ係数は小さくなる。表1をみると、男子の方が女子よりも値はずっと小さく、二重規準をもっている人が断然多いことがわかる。そして1年生よりも4年生の方にその傾向が強く現われている。

以上のような調査結果から、「童貞」よりも「処女」の方が今なお重視されており、婚前の性行動に対して「女性に厳しく、男性には緩やか」という伝統的二重規準が現在でも生きることが如実に示されている。

婚約の有無と性的許容度

性行動の相手と婚約しているかどうかという違いによって、性的許容度がどれほど変化するかを検討してみる。ここでは女性に向けられる性的許容度の規準を女性スケール (female scale) とし、男性に向けられる許容度の規準を男性スケール (male scale) とする。図2は「婚約の有無」によって、「キス」「ペッティング」「性交」という性行動タイプに対する支持率（「はい」と認めた割合）の変化を男女のスケールごとに表したものであるが、全般的に女性スケールに比べて、男性スケールの方が支持率は高くなっている。

男女差は「婚約有」の「キス」ではほとんどなく、9割以上が支持している。性行動が「ペッティング」「性交」と進むにつれて支持率は低下するが、男子の方が女子よりも許容的である。「婚約有」から「婚約無」になると、男女の支持率の差は拡大していく。

学年別にみると、「婚約有」の場合、男子では1年生と4年生の間であり差はみられないが、「婚約無」の「性交」では4年生の方が幾分許容的で有意差が認められる。女子では「婚約有」の場合でも、「ペッティング」「性交」で有意差がみられ、4年生の方が全般的に許容的である。

大学生の性意識と性行動

女性スケール

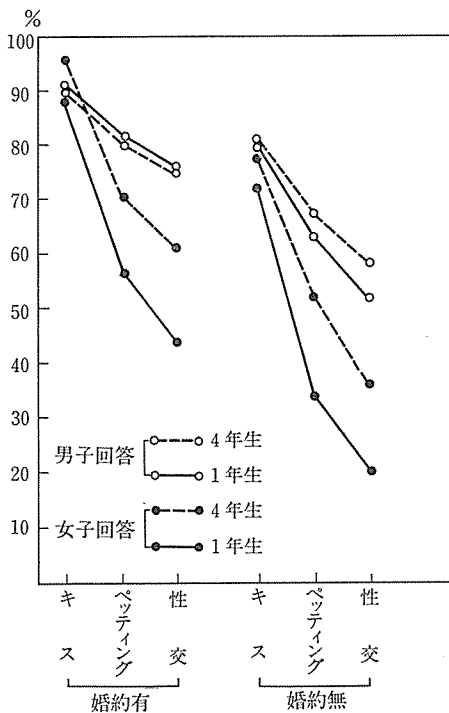


図2-1 婚約有無別性行動の支持率 (学年比較)

男性スケール

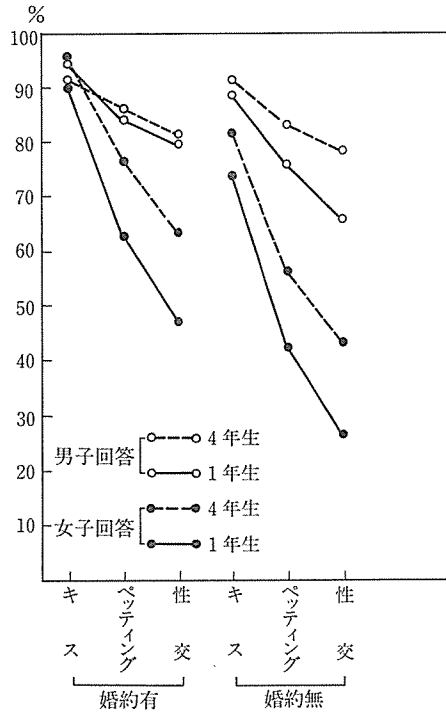


図2-2 婚約有無別性行動の支持率

次に、婚約の有無がほぼ一次元尺度になっていることに着目し、婚約の有無についての回答者の反応を類型化してみよう。「婚前性交否定型」とは「婚約している」時でも性交を認めない人であり、「婚約条件型」とは「婚約している」時のみ性交を認める人であり、「婚約不要型」とは婚約の有無に関わりなく性交を認めている人である。「例外型」とは、上記の反応パターンに属さない人である。つまり、「婚約していない」時は性交を認めているにもかかわらず、「婚約している」時は認めないか、「わからない」と回答した人である。

この婚約別性交許容パターンを回答者の性別、学年別にみると、図3のように、女子では「婚前性交否定型」が、男子では「婚約不要型」が多くを占めている。学年別に比べると、女子の場合「婚約不要型」の割合は、女子スケールでは4年生36.0%、1年生18.9%、男子スケールでは4年生42.2%、1年生24.4%と2割近くもの差がみられる。男子の場合、その差は10%以下であり、学年差は余りない。

愛情の程度の許容度

愛情の程度を「深く愛している」「好感をもつ」「恋愛・好感などの感情をもたない」の三段

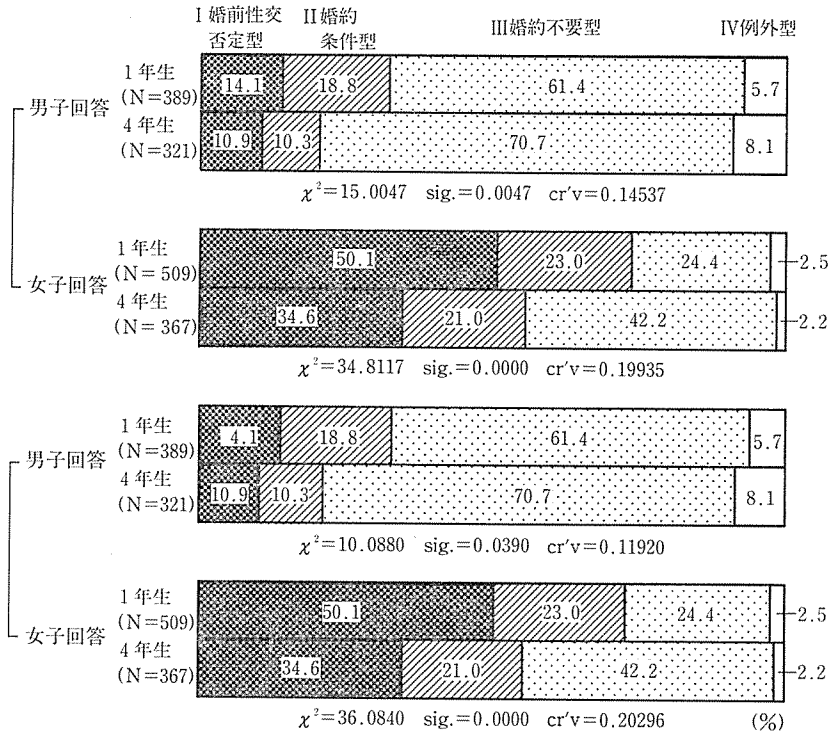


図3 婚約の有無による性交許容パターン

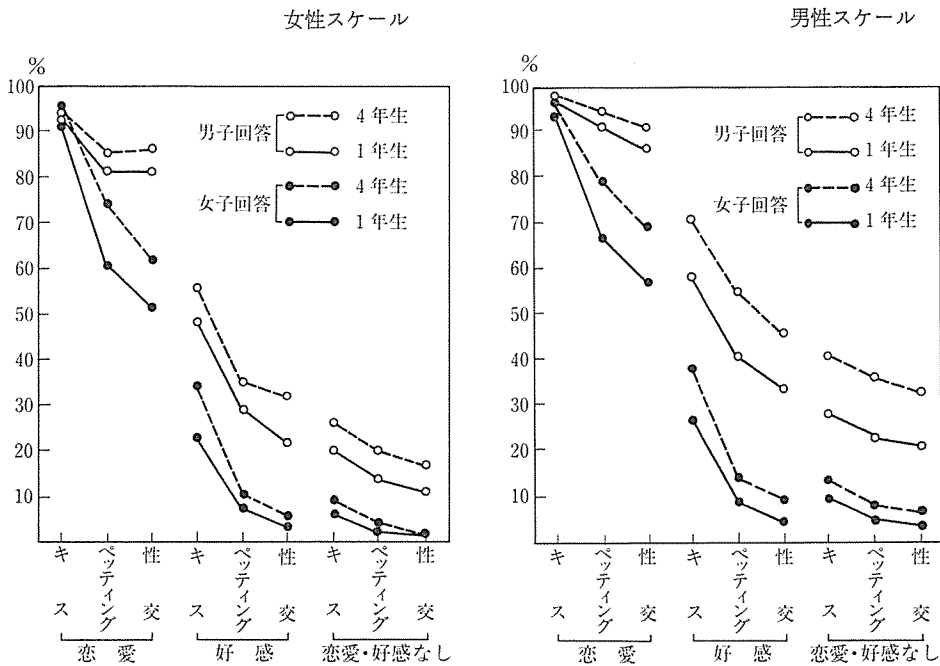
階に分けて、それぞれの段階での性行動許容度をみたのが図4である。

性行動表現での差異をみると、各段階とも「キス」から「ペッティング」「性交」へ進むほど許容度は減少しているが、愛情の程度による変化の方が大きい。

相手を「深く愛している」場合にはほとんどのものが「キス」を認めているが、「ペッティング」「性交」になると女子では5割まで減少する。一方、男子ではその変化は緩く、8割以上が「性交」を認めている。男女とも愛情の程度が浅くなるほど、支持率は減少し、女子では「好感なし」の「性交」の支持率はわずか2%にすぎず、支持率の変化は男子よりも女子の方が大きい。

学年別にみると、4年生の方が1年生に比べて全般的に幾分許容的である。学年差が一番大きいのは、男性スケールでの男子回答の支持率である。

次に、同一回答者における反応の仕方によって、次の4つの愛情深度別、性交許容パターンに分類した。「厳格型」とは「深く愛している」時でも性交を認めない人であり、「愛情重視型」とは「深く愛している」時のみ性交を認める人であり、「好感条件型」とは「好感をもって」程度で性交を認める人であり、「無条件型」とは相手に何らの好感を抱いていなくても、



性交を認める人である。「例外型」とは、上記の型に属さない反応をしている人である。それぞれの型の割合をみると、図5のように、回答者の性別をとわず「愛情重視型」が最も多くを占めている。二番目に多いのが女子では「厳格型」、男子では「無条件型」である。学年別にみると、1年生の方が「厳格型」が多い。これらの結果から、女子の方が男子よりも性的行為の際に愛情を重視していることや、高学年の方が性行動に許容的であることがわかる。

伝統的二重規準

今度は、同一回答者における女性スケールと男性スケールとのずれから二重規準のパターンを導き、男に寛大で女に厳しいという「伝統的二重規準」がどれほどみられるか検討してみよう。ここでは、「許容的単一規準型」とは、同一状況、同一性行動表現に対して、男女のいずれのスケールにおいても、「はい」と支持する回答をした人である。「厳格的単一規準型」とは、スケールのいかなをとわず、「いいえ」と否定する回答をした人であり、「伝統的二重規準型」とは、男性スケールについては「はい」と回答し、女性スケールについては「いいえ」あるいは「わからない」と答えた人である。「逆転的二重規準型」とは女性スケールに対しては、「いいえ」「わからない」と答えた人である。「判断保留型」はいずれのスケールにおいても「わからない」と回答した人である。

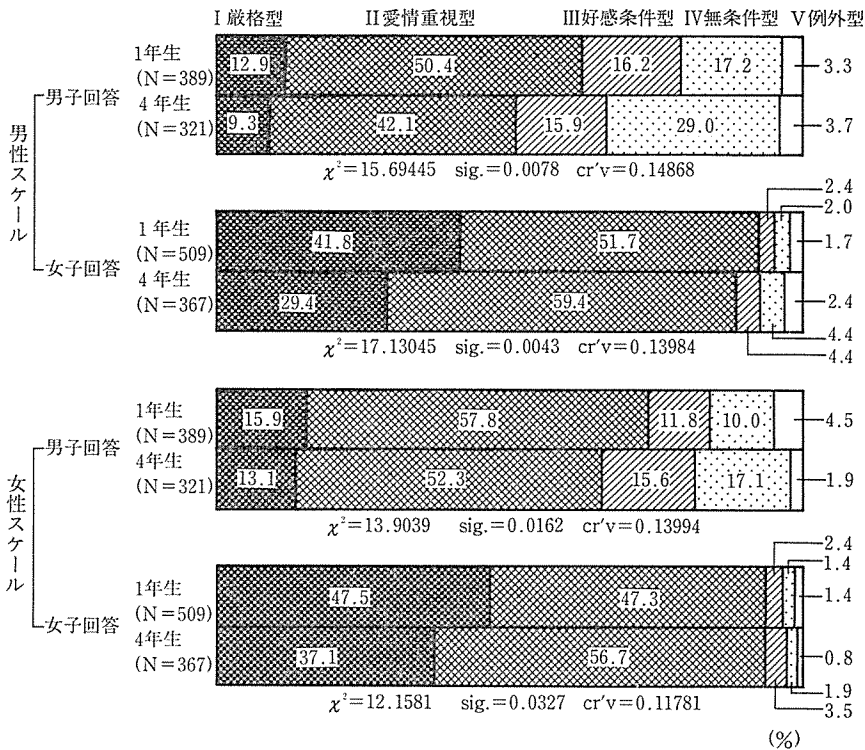


図5 愛情の程度からみた性交許容パターン

「許容的単一規準型」は「婚約有」「恋愛」の場合には男女とも多いが、「婚約無」「好感」「恋愛・好感なし」の順で減少し、「厳格的単一規準型」が逆に増加する。男女別にみると、「許容的単一規準型」では男子が、「厳格的単一型」では女子が多い。「伝統的二重規準型」は「婚約有」や「恋愛」では少ないが、「婚約無」「好感」「好感なし」では1割以上を占めている。

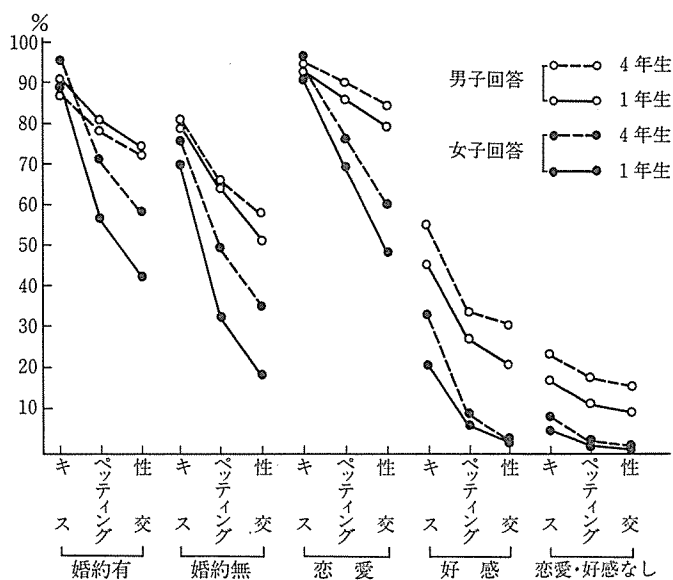
学年別に検討すると、女子では婚約の有無別では4年生の方に「許容的単一規準型」が多く有意差がみとめられるが、愛情の程度別で有意差はほとんどみとめられない。男子は逆に「婚約」や「恋愛」では有意差はなく、「好感」「好感なし」の方で有意差がある。「許容的単一規準型」や「伝統的二重規準型」では4年生の方が多くなっている。

3. 婚外性交

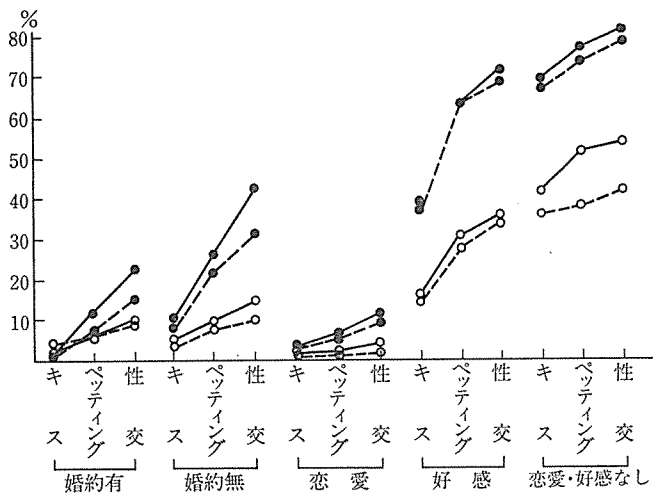
昨今のマス・メディアの＜不倫ブーム＞が若者達の婚外性関係に関する規範にどのような影響を与えているのであろうか。図7をみると、「夫の浮気」について女子では7割が「悪い」と厳格な態度をとっているが、男子では5割ほどであり、女子に比べて寛大な態度をとり、学

大学生の性意識と性行動

① 許容的単一規準型



② 厳格的単一規準型



③ 伝統的二重規準型

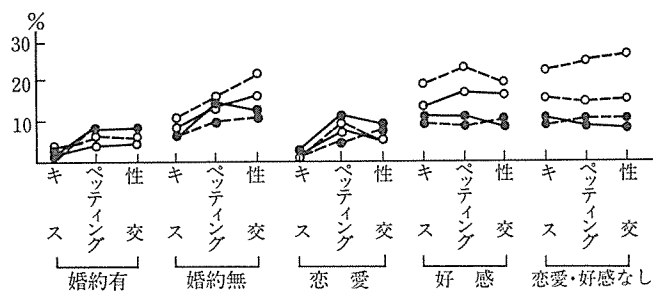


図6 二重規準パターン (男女別・学年別)

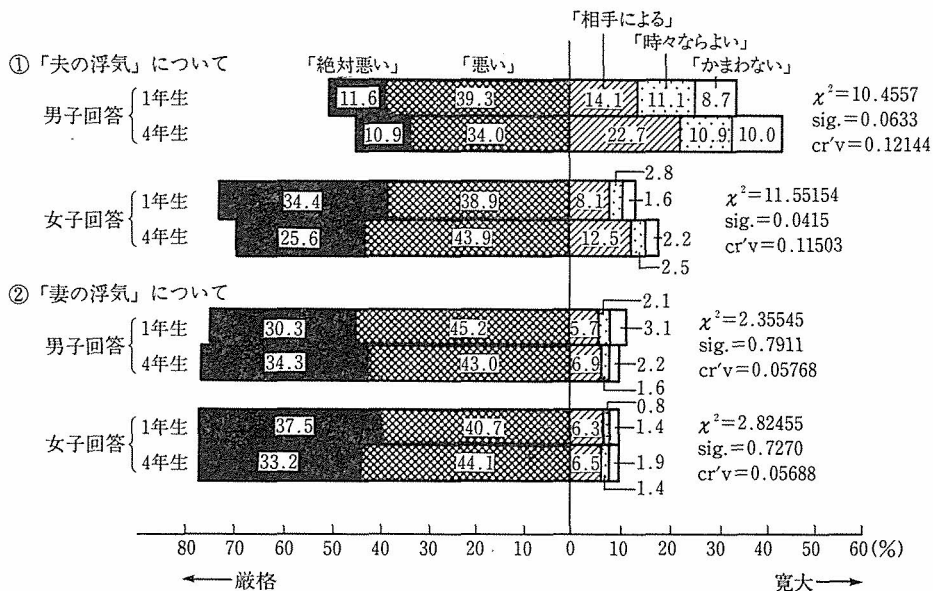


図7 婚外性交の評価

表1 評価の差：ガンマ係数

		1 年 生	4 年 生
処 女 — 童 貞	女 子 回 答	0.67430	0.55350
	男 子 回 答	0.32543	0.18739
婚 外 性 交 妻 — 夫	女 子 回 答	0.77258	0.80844
	男 子 回 答	0.58808	0.47359
買 春 女 — 男	女 子 回 答	0.43827	0.23347
	男 子 回 答	0.61797	0.38800
売 春 女 — 男	女 子 回 答	0.7980	0.82192
	男 子 回 答	0.81771	0.73812

年別有意差はみられない。一方、妻の浮気については男女ともに8割近くが否定的な態度をとり、学年による有意差はみられない。

同一回答者による妻の浮気——夫の浮気に対する評価のずれから、二重規準の程度をガンマ係数で測定すると、表1のように、男子の方が数値が低く、二重規準をもっている者が多い。学年別にみると、女子では学年によってあまり差はないが、男子では4年生の方が値がかなり低くなっている。つまり、男子の場合、年令が高い方が夫の浮気に寛大になっている。

4. 買春・売春の評価

ソープランドをはじめ、ホテル、愛人バンク、テレフォンクラブなど多種多様なセックス産業が続出し、売春の形態も組織的・管理的なものから、主婦や中学・高校生などの私的なものもめずらしくなっている。売春と恋愛の境界線さえもぼやけてきていると言われる昨今、若者達は買春・売春をどのように扱っているのだろうか。通常、“バイシュン”は売側の女性に焦点があてられがちであるが、ここでは買う側にも関心を払い、男女対の質問を試みた。

買 春

「男性がお金を払ってセックスすること」について、女子では5割以上が「悪い」と回答しているのに対して、男子では3割にとどまり、「しかたがない」が最も多く、「よい」も1割以上ある。男子では1年生よりも4年生の方が買春を容認する傾向がある。

次の「女性がお金を払ってセックスすること」について、男女ともに「悪い」が一番多く、買春においても男女の二重規準が明白に現われている。学年別有意差はなく、性別では女子の方が否定的割合が多くなっている。

買春容認の理由（3つ以内で選択）では、「性欲を満たすために必要」が群をぬいてトップの座を占めている。次には、男の買春では「気晴らしに役立つ」「好奇心を満足させてくれる」「男の甲斐性」が掲げられる。女性の買春では「男もしていることだから」が第2位にのぼっている（図8）。

表2 買 春 の 評 価

			男性がお金を払う場合				女性がお金を払う場合			
			女 子 回 答		男 子 回 答		女 子 回 答		男 子 回 答	
			1 年 生	4 年 生	1 年 生	4 年 生	1 年 生	4 年 生	1 年 生	4 年 生
よ い			2.9	2.7	16.5	21.8	2.3	2.2	7.2	5.3
しかたがない			24.8	30.5	35.5	41.1	4.3	5.7	18.0	16.8
悪 い			54.8	51.8	30.0	22.1	74.1	69.2	49.9	54.5
わ か ら な い			17.3	14.7	18.0	14.0	18.9	22.6	23.9	22.4
不 明			0.2	0.3	0.0	10.0	0.4	0.3	1.0	1.0
計			100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
N			509	367	389	321	509	367	389	321
検 定	χ^2 検定	χ^2 値	3.93873		13.70513		13.14122		2.05347	
		Significance	0.4144		0.0083 *		0.5345		0.7259	
		Cr 係 数	0.06705		0.13894		0.05988		0.05378	

***<0.0001 **<0.001 *<0.01

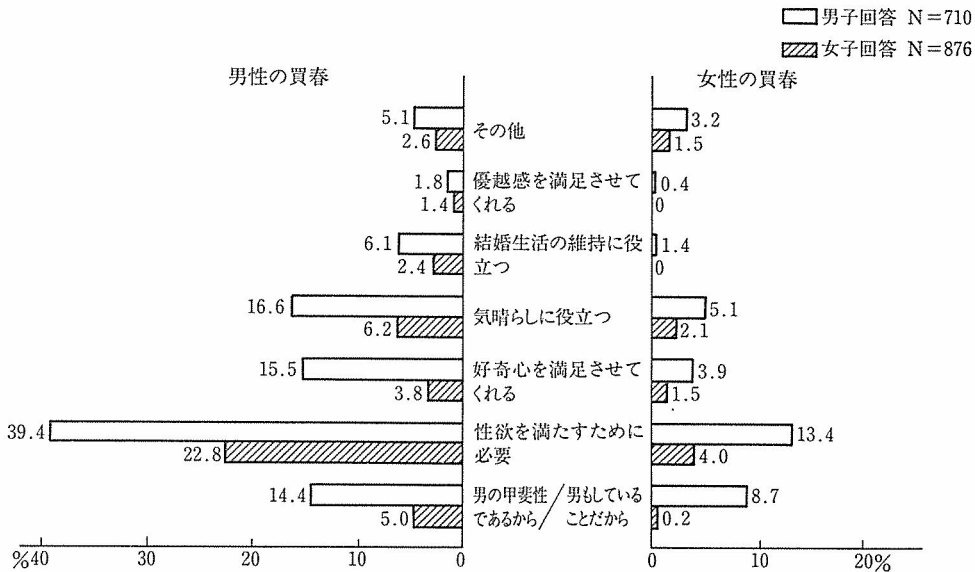


図8 買春を容認する理由（3つ以内複数可）

売 春

次に、「性を売ること」の評価を調べてみる。女の売春について、女子の回答では、否認の「悪い」と容認の「本人の勝手」「生活のためならしかたがない」がほぼ同じ割合になっている。男子では、「本人の勝手」が4割以上と最も多く、「悪い」は3割ほどしかなく、女子よりも売春を認容する傾向が強くみられ、学年別有意差はみられない（図9）。

男の売春についても同様の傾向がみられ、女子では意見が二分されているが、男子では「本人の勝手」が圧倒的に多くなっている。

これまでの質問は「一般論」として質問していたが、今度は「自分の恋人や結婚相手が買・売春に関わる場合」と、限定的にたずねてみた。一般論では買・売春を認める人も少なからず存在していたが、この設問に対しては、9割以上の者が拒絶反応を示した。他人事では寛大になれても、こと自分のパートナーとなると厳しくなる姿が浮きぼりになっている。

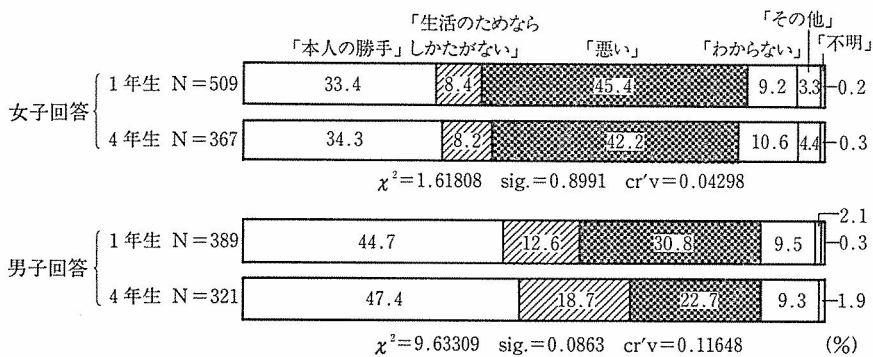
5. 異性交際と性経験

異性交際の有無

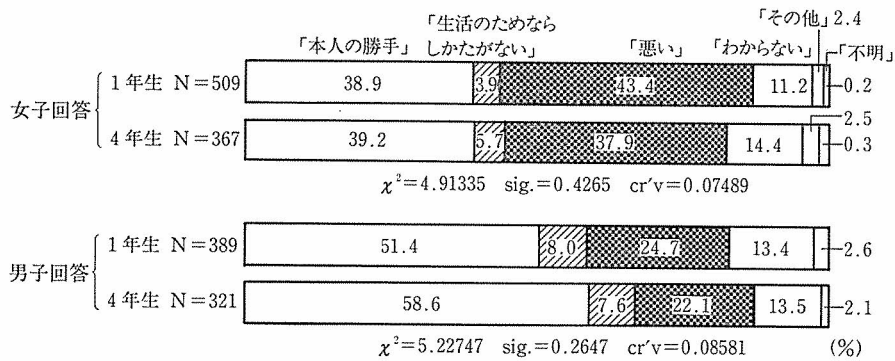
まず初めに、回答者自身の現在の異性交際の有無を調べたところ、1年生では「目下、交際している異性はいない」が5割を占めているが、4年生になると減少し、一方「恋人がいる」の割合が増え、学年別有意差が明かにみられる。女子の方が幾分、異性交際は進んでいるが、性差についての統計的有意差はみられない。

大学生の性意識と性行動

① 女の売春



② 男の売春



結婚相手や恋人の場合の売・買春

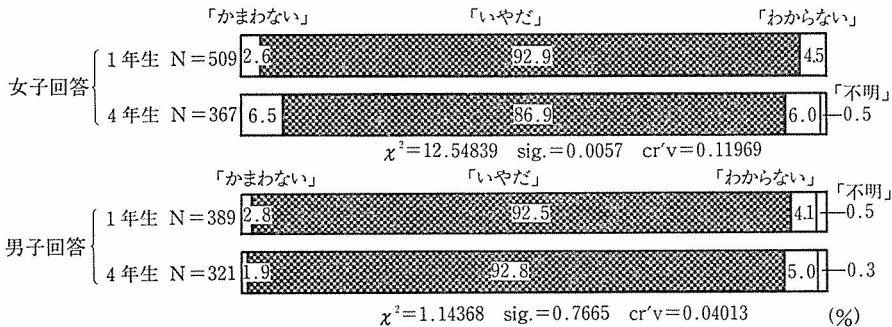


図9 売春についての一般的評価

表3 現在の異性交際

	女 子		男 子	
	1 年 生	4 年 生	1 年 生	4 年 生
結 婚 している	0.2 %	0.3 %	1.0 %	0.3 %
同 棲 している	0.2	1.6	0.5	0.3
婚 約 している	1.8	4.4	0.5	1.9
恋 人 が いる	10.8	32.2	8.8	24.0
異性の友達がいる	35.8	27.0	31.4	34.6
交際している異性はいない	50.9	33.5	55.8	38.3
不 明	0.3	1.0	2.0	0.6
計	100.0	100.0	100.0	100.0
N	509	367	389	321
χ^2 検 定	$\chi^2=81.7019$ sig.=0.0000 ***		$\chi^2=45.46559$ sig.=0.0000 ***	
Cr 係 数	0.30540		0.25305	

性体験の有無

回答者自身の性体験をみると、学年が進むほど性体験者が増加している。1年生の女子では72.9%が「性体験なし」になっており、「性交あり」はわずか7.4%にすぎない。4年生になると「性体験なし」は3割までに減少し、「性交あり」が35.4%にのぼっている。男子ではその傾向がより鮮明にみられ、4年生での「性体験者」は59.2%にまでなっている。5年前の調査データと性別・学年別に比較すると、女子の4年生の場合のみ、性体験者が1割以上増加している。

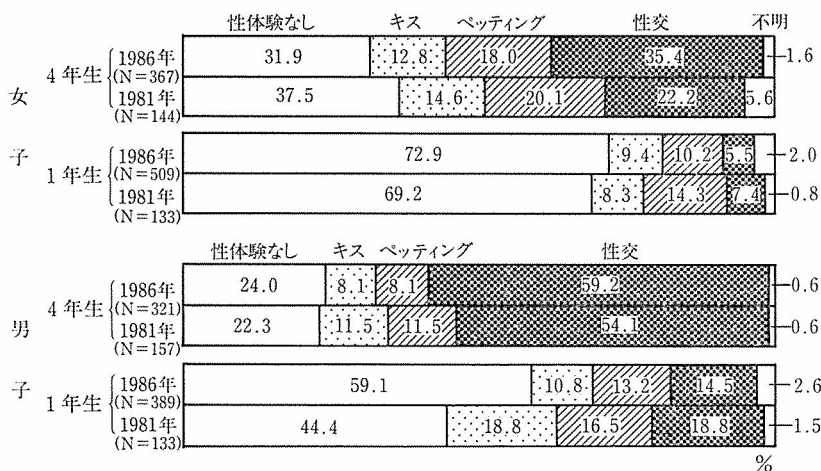


図10 婚 前 の 性 体 験

大学生の性意識と性行動

次に、性交体験のある人のみ、初めての性交時の相手とその際の避妊の実行の有無を調べた。女子では「恋人」が8割と圧倒的に多く、男子でも「恋人」が51.2%で、男女とも1981年に比べて「恋人」の割合が増加している。男子では、「恋人」「友人」のほか、「売春」や「ゆきずり」など、これまでに交際のない相手や金銭を媒介とした相手が2割も占めている。

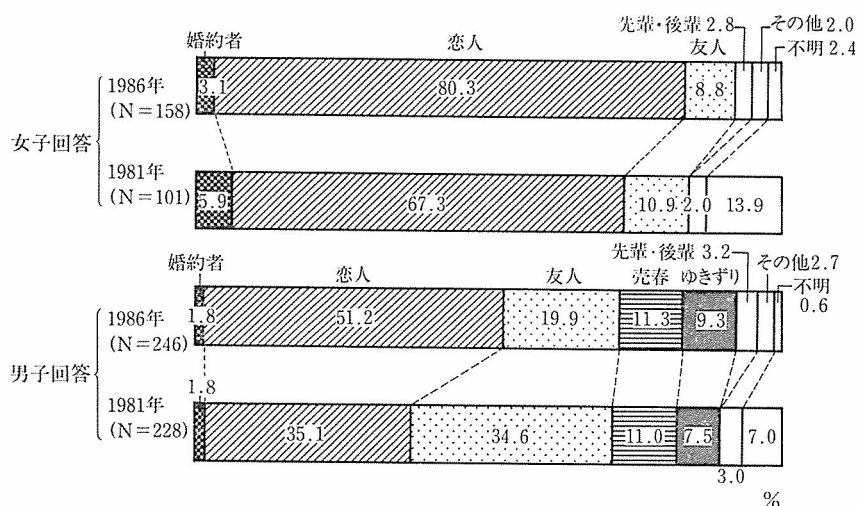


図11 初めての性交の相手

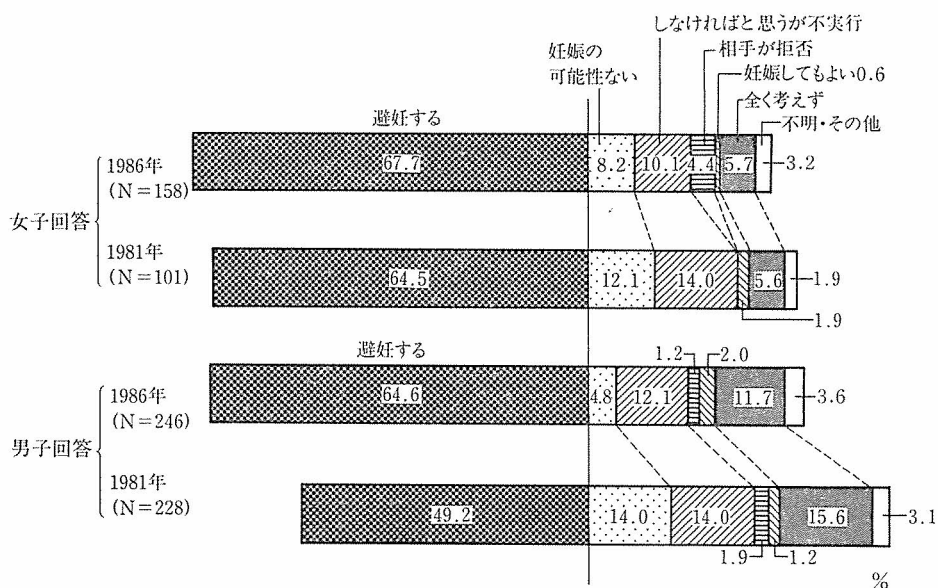


図12 避妊の実行の有無

表4 学年・男女別の χ^2 検定と支持率の差

				学年の χ^2 検定		男女の χ^2 検定		成熟効果による支持率の男女差
				女 子	男 子	1 年 生	4 年 生	
婚約の有無	男性スケール	キ ス	婚約 有無	*	(-)	* * *	(-)	(-) +
		ペッティング	有無	* *		* * *	* * *	++
		性 交	有無	* * *	*	* * *	* * *	++ +
	女性スケール	キ ス	婚約 有無	*	(-)	* * *	(-)	+
		ペッティング	有無	* * *	(-)	* * *	* * *	++ ++
		性 交	有無	* * *		* * *	* * *	+++ +
愛情の程度	男性スケール	キ ス	恋好な 愛感し	* *	* *	* * *	* * *	(-) +
		ペッティング	恋好な 愛感し	* *	* *	* * *	* * *	++ (-) +
		性 交	恋好な 愛感し	*	* *	* * *	* * *	+ (-) +
	女性スケール	キ ス	恋好な 愛感し	* *		* * *	* * *	(-)
		ペッティング	恋好な 愛感し	* * *	*	* * *	* * *	++ (-) +
		性 交	恋好な 愛感し	* (-)	* *	* * *	* * *	+ (-) +
	処女・童貞の評価		処女 女貞	* * *		* * *	(-)	++
	婚 外 性 交		妻 夫		(-)	* * *	* * *	
	買 売 春	買 春	女 性 性		(-)	* * *	* * *	(-) +
売 春		女 性 性			* * *	* * *	(-) +	
自分のパートナー		*	(-)			(-)		
性 経 験 の 程 度				* * *	* * *	* *	* * *	

χ^2 検定 ***<0.0001 **<0.001 *<0.01

(1年生男-1年生女)-(4年子男-4年生女) ++>15% ++>10% +>5%

「避妊の実行の有無」については、1981年調査では避妊をしていない者が男子に多くあり、男女間に有意差が存在していたが、1986年調査では男女とも60%以上の者が「避妊を実行」しており、男女の有意差はなくなっている。

III 命 題 の 検 証

1. <性差>の命題

<性差>の第1命題

「男性は女性よりも性行動に許容的である」という性差の第1命題を、表4から検討してみよう。*印は χ^2 検定の有意水準のレベルを表わしている。(一)印は命題と逆の傾向が少しでもみられる場合である。たとえば、「男は、婚約している女性とキスしてもよい」という設問で、「はい」の割合が4年生では男子よりも女子の方が3.2%多かった。この結果は<成熟効果>の命題1に反するために、一印を付けた。

(1) 婚約の有無別——1年生の場合には、性差の第1命題は完全に有効である。4年生になると「キス」の項目では男女にかかわりなく多くの人が認め、統計的有意差はみられない。そのほかの項目では、高水準の有意差で支持される。

(2) 愛情の程度別——「恋愛」の場合の「キス」には女子も許容的であり、両スケールにおいて有意差がほとんどみられない(男性スケールの1年生のみ0.01の低い水準での有意差がみられる)。他の項目では、ほぼ高水準の有意差がみとめられ、この命題はかなりの程度支持される。

(3) 処女・童貞——処女では1年生・4年生ともに有意差はないが、童貞では両学年ともに有意差がみられる。つまり、童貞に関しては男子は女子よりも許容的であるが、処女については厳格な回答をする割合が女子よりも多くなっている。結局、性差の第1命題は「童貞」の項目のみ妥当する。

(4) 婚外性交——「妻の場合」には有意差があらわれず、男女ともに「妻の浮気」には厳しい。一方、「夫の場合」には男子は許容的で男女間に有意差がみられ、命題は支持される。

(5) 買・売春——常に男子は許容的であり、性差の第1命題は有効である。しかし、「自分のパートナー」の場合には、男女とも拒否的であり、この命題はほとんど妥当しない。

以上のように、日本では<性差>の第1命題は多くの項目で今なお支持されている。

<性差>の第2命題

「男性は女性に比べて伝統的二重規準を支持する割合が高い」という性差の第2命題を、「二重規準パターン」の χ^2 検定、および前述のガンマ係数から検討してみよう。「二重規準パター

表5 二重規準の程度

ガンマ係数の差	学 年 差		性 差	
	女(1年生—4年生)	男(1年生—4年生)	1年生(男—女)	4年生(男—女)
処女—童貞	* (—)	* (—)	* * *	* * *
婚外性交		* (—)	*	* * *
買 春	* * (—)	* * (—)	* (—)	* (—)
売 春		(—)		

ガンマ係数の差 0.3<*** 0.2<** 0.1<*

(—)は命題と反対の値

ン」の処理は、「許容的単一規準型」と「厳格的単一規準型」は双方とも男女同一の規準であることから、それぞれの割合を合計した上で、 χ^2 検定した。

(1) 婚約の有無別——有意差は余りみられず、性差の第2命題はそれほど支持されない。

(2) 愛情の程度別——「好感」から「恋愛・好感なし」になるほど有意差が現われる。つまり、男子は女子に比べて愛情関係のない性関係について、男性には寛大であるが、女性には抑圧的であり、その限りにおいて命題が支持される。

(3) 処女・童貞——ガンマ係数では、男子の方が女子よりも低く、伝統的二重規準の者が多く、命題は支持される。

(4) 婚外性交——ガンマ係数での男子の値は女子よりも低く、命題は支持される。

(5) 買・売春——女子の方が男子よりもガンマ係数の値は低く、命題は否定される。

<性差>の第3命題

「男性は女性に比べて性経験の割合が高い」という性差の第3命題を、「性体験の有無」の項目の χ^2 検定から調べると、性体験の有無では高い水準で有意差がみられ、命題は支持される(表4)。

2. <成熟効果>の命題

<成熟効果>の第1命題

「若者が成熟するほど、性意識は許容的になる」という<成熟効果>の第1命題を、1年生と4年生を男女別にそれぞれ比較した表4から検討しよう。

(1) 婚約の有無別——女子の方が男子よりも有意差のあるものが多い。特に、女子の「ペッティング」「性交」では<成熟効果>が顕著に現われている。つまり、高学年になると婚約の有無にかかわらず、性行動に許容的になる傾向がみられ、命題はほぼ女子のみ支持される。

(2) 愛情の程度別——女子は高学年になるほど、「恋愛関係」や「好意」がある場合に性関係を認める傾向にあり、反対に男子回答者では高学年になると相手の女性に恋愛感情や好感がな

くとも性行為を認める傾向にある。つまり、男女によって命題が支持される項目が異なる。

(3) 処女・童貞——女子の方にく成熟効果>が顕著に現われ、女子は高学年ほど特に処女にこだわらなくなる。男子の場合は有意差はなく、この命題は適用されない。

(4) 婚外性交——学年間の有意差はなく、この命題は支持されない。

(5) 買・売春——男子では高学年になるほど男の売春を容認する方に傾く。一方、自分のパートナーの買・売春に対して、女子では高学年の方が容認にやや傾く。しかしながら、全般的に有意差はほとんどみられず、この命題はほぼ否定される。

<成熟効果>の第2命題

「若者が成熟するほど、男女間の許容度の差は縮小する」という<成熟効果>の第2命題を、表4の「成熟効果による支持率の男女差」にもとづき、検討してみよう。この値は1年生の男女の支持率の差（1年生男子回答者－1年生女子回答者）から4年生の男女の支持率の差（4年生男子回答者－4年生女子回答者）を引いたものである。なお(－)の印は、4年生の方が1年生よりも男女差が大きくなり、命題と反対の方向になっている場合である。支持率とは、「婚約の有無」と「愛情の程度」では「はい」と答えた人の割合、「処女・童貞の評価」では「必要なし」「性体験が望まし」と答えた割合、「婚外性交」では「よい」「時々ならよい」、「買・

表6 二重規準パターンでの χ^2 の有意差検定

			1 学年の有意差検定		男女の有意差検定	
			女 子	男 子	1 年 生	4 年 生
婚約の有無	婚約有	キ ス ベッティング 性 交			* * (－)	* * (－)
	婚約無	キ ス ベッティング 性 交		(－) (－) (－)		
愛情の程度	恋 愛	キ ス ベッティング 性 交		(－)	* * (－)	* (－)
	好 感	キ ス ベッティング 性 交		(－) (－) (－)	* * *	* * *
	な し	キ ス ベッティング 性 交		(－) * (－) * (－)	* * *	* * *

χ^2 検定 ***<0.0001 **<0.001 *<0.01

売春」では「よい」「しかたがない」と答えた人の割合である。

(1) 婚約の有無別——4年生の方が「キス」などの項目でも支持率が逆転しているだけで、全体としてはほぼ支持されている。

(2) 愛情の程度別——この命題は「恋愛」では少し支持されるものの、「好感」「恋愛・好感なし」では逆に4年生の方が1年生より男女差が拡大しており、この命題は支持されない。

(3) 処女・童貞——処女のみこの命題は支持される。

(4) 婚外性交——学年による男女差に違いは少なく、この命題は支持されない。

(5) 買・売春——女性の買春以外は、命題と反対に4年生になるほど男女差は拡大していく。

以上のように、＜成熟効果＞の第2命題は「婚約」と「恋愛」「処女」などの項目のみに成立するだけである。

＜成熟効果＞の第3命題

「若者が成熟するほど、伝統的二重規準は弱まる」という＜成熟効果＞の第3命題を表5の χ^2 検定と表6のガンマ係数から検討してみよう。

(1) 婚約の有無別——学年による有意差はすべてなく、命題は支持されない。

(2) 愛情の有無別——男子では反対に4年生の方が伝統的二重規準がいくぶん多くなっており、男女とも全く支持されない。

(3) 処女・童貞——男女とも4年生の方に二重規準の強まりがみられ、命題は支持されない。

表7 命 題 の 検 証

	＜性 差＞ の 命 題			＜成 熟 効 果＞ の 命 題		
	第1許容性	第2二重規準	第3性経験	第1許容性	第2性差	第3二重規準
婚約の有無	○ 例外ーキス	婚約有 △ 婚約無 ×	/	女子 ○ 男子 ×	○ 例外ーキス	×
愛情の程度	○ 例外ーキス	恋愛 △ 好感 △ なし ○		△	恋愛 △ 好感 × なし	×
処女・童貞	処女 × 童貞 ○	○		女子 ○ 男子 ×	処女 ○ 童貞 ×	×
婚 外 性 交	夫 ○ 妻 ×	○		×	×	×
買 売 春	○ 例外ー自分	×		×	×	×
性 体 験	/		○	/		
有意水準高い ○ 有意水準低い △ 有意差なし × 命題と反対の有意差 ×						

(4) 婚外性交——男子の4年生の方が1年生に比べて逆に二重規準は強まり、命題は支持されない。

(5) 買・売春——買春では男女とも4年生の方が逆に二重規準が強まり、命題は全く支持されない。

考 察

＜性差＞の命題は、一部の項目では妥当しなかったが、全体的にみると有効であり、今なお日本では男女の間の性意識に差が存在している。＜成熟効果＞の命題については、「婚約の有無」や「処女」では妥当するが、ほとんどの項目は支持されない。二重規準についての第3命題ではむしろデータは反対方向を示している。つまり年令が高くなるほど二重規準の考え方が強まっている。男女平等という観点からすると、これは重大な結果である。現在計画中のパネル調査でもこのような結果が出てくるのであろうか。もしそうであるならば、命題を正するだけでなく、なぜそのような事が生じるのか、そのプロセスを解明していくことが重要になってくよう。

付記

この「第3回性意識・性行動調査」は、昭和61年度の文部省科学研究費の助成（奨励研究）をうけて行われたものである。調査票についてご助言を賜った関西大学の岡田至雄教授をはじめ、調査実施に快くご承諾とご協力を載いた諸先生方および学生の皆さんに心より感謝の意を表します。

参 考 文 献

- Bell, R. R., and J. B. Chaskes (1970) "Premarital sexual experience among coeds, 1958 and 1968." *Journal of Marriage and the Family* 32: 81-84.
- Carroll Leo (1980) "Concern with AIDS and the sexual behavior of college students" *Journal of Marriage and the Family* 50: 405-411.
- Christensen. H. T., and C. F. Gregg (1970) "Changing sex norms in America and Scandinavia." *Journal of Marriage and the Family* 32: 616-627.
- Ferrell, M. Z., W. L. Tolone, and R. H. Walsh (1977) "Maturation and societal changes in the sexual double-standard: A panel analysis (1967-1971; 1970-1972)." *Journal of Marriage and the Family* 39: 255-271.
- Jacoby Arthur P. and John D. Williams (1985) "Effect of premarital sexual standards and behavior on dating and marriage desirability" *Journal of Marriage and the Family* 47: 1059-1065.
- Singh B. K. (1980) "Trends in attitudes toward premarital sexual relations" *Journal of Marriage and the Family* 42: 387-393.
- Smigel, Erwin O., and Rita Seiden (1969) "The decline and fall of the double-standard." pp. 254-263. in Jeffrey Hodden and Marie L. Borgatta (eds.), *Marriage and the Family*. Itasca, Illinois: FE. Peacock Publishers, Inc.

- Reiss, Ira L. (1956) "The double-standard in premarital sexual intercourse : A neglected concept." *Social Forces* 34 : 24-230.
- Reiss, Ira L. (1960) *Premarital Sexual Standards in America*. New york : The Free Press.
- Reiss, Ira L. (1969) *The Sociol Context of Premarital Sexual Permissiveness*. New york : Holt Rinehart, and Winston.
- Reiss, Ira L., and Brent C. Miller (1979) "Heterosexual permissiveness : A theoretical analysis" pp. 57-100. in Wesley R. Burr, Rouben Hill, F. Ivan Nye, and Ira L. Reiss (Eds). *Contemporary Theories about the Family* (1) New York, Free Press.
- Reiss, Ira L., (1981) "Some observation on ideology and sexuality in America." *Journal of Marriage and the Family* 43 (2) : 271-283
- Robinson, I. E., K. King, and J. O. Balwick (1972) "The premarital sexual revolution among college females." *Family Coordinator* 21 : 189-194.
- Robinson, I. E. and Jedlicka, D (1982) "Change in sexual attitudes and behavior of college students from 1965 to 1980." *Journal of Marriage and the Family* 44 (1) : 237-240
- Verner, Arthur M., and Cyrus S. Stewart (1974) "Adolescent sexual behavior in middle America revisited : 1970-1973" *Journal of Marriage and the Family* 36 : 728-735.
- Walsh Bobert H and Mary L. Ferrell (1976) "Selection of reference goup, perceived reference group permissiveness, and personal permissiveness attitudes and behavior : A study of two consecutive panels (1967-1971 ; 1970-1974). *Journal of Marriage and the Family* 38 : 736-741.
- 善積京子 (1983) 「性規範にみる女性差別—若者の意識調査を中心として」『女性学年報』第4号, pp. 63-76. 日本女性学研究会,
- 善積京子, 楠崎ルリ子, 村上昌子, 森 陽子, 長沢保子 (1986) 「高校生性の意識と性行動—大学生との比較調査」『大手前女子短期大学研究集録』第6号, pp. 58-91,
- 善積京子, 小泉直子 (1987) 「若者の性知識の実態」『大手前女子短期大学研究集録』第7号, pp. 22-33